

34年間の保健師職務の中で、沖縄本島での勤務や長期の研修を除く28年間は、波照間・石垣島・多良間島・宮古島で、地域住民と時間、空間を同じくして、住民とその地域に働く保健・医療・福祉関係者を良好な関係において、その人たちの知識や知恵を十分借していただいて、住民の健康生活の保持・増進を目指して活動をしてきた。

そこにおいては、物の見方や考え方の違いや説明不足や焦り等で事が上手く運ばないことは、常につきもので、自分をその混沌とした中に置きながら、実践を継続していく中で、また、人間関係も学び、上手く展開するコツも学んだ。

さらに、平成21年度は、平成20年度からスタートした「保健医療福祉、教育・行政などの幅広い多職種ケア連携・協働による保健医療福祉活動を通して、島嶼住民の生活文化に根ざした看護を実現できる高度な島嶼看護専門能力を目指す」教育プログラムの中で、先端保健看護分野、新領域保健看護領域(島嶼保健看護)博士前期課程の院生として、学ぶチャンスを得た。

なんとと言っても島嶼保健看護の魅力は、島内(宮古島)、島外(石垣島・久米島・波照間島)、県内(沖縄島)、県外、国外(グアム・サイパン・テニアン)で学ぶエリアの輪が幾重にも広がっていて、実際(内)に出向いたり、講義の中で学んだり、身近な島嶼から国外までグローバルな島嶼の視点で、文化・生活・保健看護について学習できるということである。

それを通して、これまで長い保健師職務の中で、なんとなく素通りしてきたプロセスと対比しながら、実践してきたことの意味づけの大切さを認識する中で、味わいのある学びができることがうれしい。

宮古島を拠点とした島嶼保健看護領域を履修する学生は、指導教員も現地で指導を行うので、島嶼で生活している私にとっては、経済的な負担はさることながら、先生方から直接講義を受けたり院生仲間と一緒に情報交換が出来るのが楽しい。

また、テレビ会議システムの導入により、本学での講義が宮古島のサテライト教室にいて鮮明な映像で遠隔システムを通して受けられることが出来て夢の様である。島嶼で働く保健看護職の多くが学ぶ機会になっていることで、宮古島で遠隔システムの重要性を更に感じるこの頃である。

院生になったことで、35年ぶりに就職して最初に赴任した波照間島で課題研究の演習を受けたり、次に赴任した石垣島で実習が出来たりと、その保健看護分野の仲間と交流が出来たことも島嶼保健看護の院生になったから出来たことだと思う。

